

つばマリの同棲(恋愛感情一切なし)

東山恭一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り恋愛感情一切なしのつばまりの同棲話です。G以降のネタバレ注意です。たまにつばまり以外も投稿します

目次

つばマリ、部屋を片付ける	1
つばマリ、ホラー映画を見る	5
つばマリ、災難に遭う	9
【番外】 かなセレ、見守る	13
つばマリ、ポツキーゲームをする	16
つばマリ、サンタをする	19
つばマリの愛してるゲーム	23

つばマリ、部屋を片付ける

フロントティア事件からしばらく経ち、マリア・カデンツァヴァ・イヴは身の自由と引き換えに常に監視をされながらの生活を余儀なくされた。生活の場として用意されたマンションの一室はこの手の待遇としては悪くなく3部屋ほどを備えている、一人では少し広いくらいだが共同生活の名目でここにも監視の目があった。その人物とは：

「さつきから震えてどうしたマリア、小日向から教えてもらった水出しの緑茶が温まってしまっぞ。まさか寒いのか？待っている、今空調の温度を…む、リモコンはどこだ…」

茹だるような暑さの中、空調が効いた部屋でマリアと同居人の風鳴翼は立花響の親友の小日向未来から教えてもらった水出しの緑茶をすすりながら話していたがマリアが俯いてプルプルと震えていた。震えているのは翼が言うように寒いのではなく別の理由であるが翼は気づくことなくエアコンのリモコンを探している。マリアは我慢ならずバンと机を叩いて立ち上がった。

「翼！これは一体どう言うこと!?!」

「何がだマリア?」

「この部屋のことよ!」

「部屋?やはり寒いのか、だからこうしてリモコンを探して…」

「違うッ!」

マリアは手近な床を指差す、そこはとてもではないが足の踏み場がないほどに散らかりきっていた。そこだけではなく部屋全体が、完全に散らかっていた。そしてマリアは怒ったようにまくし立てた。

「私が打ち合わせから帰って来れば何よこのザマは!?!私が打ち合わせに行ってる間に泥棒でも入ったと言うの!?!」

「それは…」

「何よ」

翼が少し溜めた後神妙そうで達観したような顔で静かに宣った。

「防人たるこの身は常に戦場にあったからな、私は戦いしか知らない。」

ならばこうなるのも道理と言うものだ」

「つまり？」

「色んなものをひっくり返していたらいつの間にもやらこうなっていた」

「そんな事だろうと思っていたわ…」

「マリアが呆れたようにため息を吐くともう一度気合いを入れるように大きく息をついて決意の表情で言った。

「片付けするわよ、手伝いなさい」

「…承知した」

「ついでに貴方の部屋も片付けるわ」

そう言つて翼の部屋のドアを開けるとマリアは思わず絶句してしまった。そして絞り出すように声を出したのは少ししてからだった。

「何よ…これ…」

「マリアが見た光景は魔窟そのものだった。散らかり切ったところの表現では言い表せないような散らかり具合、足の踏み場などと言うものはとつくにない部屋だった。マリアはその光景に思わず膝から崩れてしまった。

「こんな部屋が存在するなんて…そんなの…セレナツ…私はどうしたら…」

「私の部屋を見るなり崩れ落ちてどうした？」

「酷すぎるのよ…なんでこんなので生活してたの貴方」

「…防人だからな！」

「もう良いわよその言い訳はッ！」

「マリアは拳を握りしめ覚悟を決めたように声高に言った。

「狼狽えるなッ！世界を救うのに比べればこの程度安いものッ！」

「その通りだマリア、お前がどれだけ拒絶しようと私も手伝う。それが防人としての私の使命だ」

「当然手伝うのよ、防人とか関係なしに」

「承知」

そして始まった掃除はかなりの苦難を要した。まず散らかり放題な物を片付ける作業から入ったが…

「これはここね、これは…」

「失くしたと思っていたリディアンの楽譜！こんなところにあつたのか！」

「しまった側から出すなッ！」

「む、すまん」

「全く貴方は…」

こんなやりとりが何回も続き物を片付けるだけでも時間を要した。次に部屋の掃除を始めたが…

「なんでいきなり掃除機をかけるのよ！まず部屋の上の誇りをハタキか何かで落とさないという意味ないでしょ！」

「そんなものか…承知した」

翼の壊滅的生活力から繰り出される謎行動によりマリアは頭を抱えながら何とか掃除を終えた頃には日が沈もうとしている頃だった。

「疲れたわね…」

「同感だ…」

二人はリビングで寝転がって地獄の掃除が終わったのを労いあっていた。

「にしても翼…貴方もう少し日常生活をマトモにしなさい」

「それはどうだろうな」

「どう言うことよ」

「私は防人でありこの身は剣だ、それは戦いが続く限り変わることはない」

「だからそれは…」

マリアが遮るより先に翼が更に言葉を続けた。

「だがもし…戦いが終われば…「風鳴翼」として生きられる世界が来たならば、その時は少しはマリアの言う「マトモ」に近づけるかもしれないな？」

優しく笑う翼を見てマリアはフツと笑ったあと言った。

「ホントに…可愛くないわね」

「今更何を言う、そう語って聞かせたのはお前ではないか」

「それもそうね…っと」

マリアが立ち上がるとキッチンに向かいながら言った。

「ご飯作るからそこでじっとしてなさい、これは手伝われたら堪んないから」

「承知した、マリアの作るのは美味いからな」

「それはどうも」

二人がそう言つてクスリと笑つた後、マリアが夕飯を作り始めた。もしかしたらこれも束の間の日常かもしれない。だが少女たちの胸の奇跡ある限り、世界は何度でも歌を取り戻すだろう。

つばマリ、ホラー映画を見る

マリアと翼が住んでいるマンションの一室。二人は晩御飯を食べ終わり特に目ぼしい番組もやっていかなかったため手持ち無沙汰で暇を持って余していた。

「マリア」

「ん？」

「何かこう…暇を潰すものはないか？」

「無いわね、だからこうしてダラダラとしている訳だけど」

「ふむ…良くない状況だな、何かこの状況を打破できる一手が…」

そんな事を話しているとふと呼び鈴が鳴り宅配便だと言う声が聞こえた。

「こんな時間に宅配便とはまた奇怪な」

「私が出るわ、はい」

マリアは玄関で数言交わしたあと片手に収まる程度の小包を持って帰って来た。

「何だ？ファンレターでも来たのか？」

「指令からだし質感からして違うわね。開けてみましょう」

マリアが小包を開けるとそこにはパッケージ入りのDVDが入っていた。

「DVD…？おすすめの映画かしら…にしてもパッケージが黒…ツツ！」

「どうしたマリア、そんなに驚いて…これはツツ！」

二人が見たのはパッケージだけでも分かるようなホラー映画の類だった。

「ホラー映画…ですって」

「なるほど、指令はホラー映画も見たのだな。少し意外だ」

「…見る？」

「何だ？まさか怖いのか？」

「い、いえ！そんな事はないわ！そんな事は決して無いわ」

「そうは言うがな…」

翼はマリアの致命的な言動を指摘した。

「声が思いつきり震えているぞ。全く情けない」

「…ッ！貴方だって！ほら！」

マリアが翼の足を指すと翼の足がガクガクと震えていた。翼はそれを指摘されて悔しげに呻いた。

「ぐう…この程度で恐怖しては防人としての務めなどとても果たせぬと言うのに…ッ」

「フツ、風鳴の防人たる者がとんだザマね！」

「尚も声が震えてるお前に言われたく無いわ！」

二人はひとしきり言い合った後決意したように翼が言い放った。

「このDVD、指令からの精神鍛錬と受け取った！であるならば果たすのみ！行くぞマリア！この場に剣と槍を携えているのは私達のみ！」

「足震えてるのに結構な見栄切るのね」

「だから声が震えてるお前に言われたく無いッ！」

二人はDVDの再生を開始する。内容は町に発生した殺人鬼の謎を追うと言うようなものだった。

「む…血を見るのは慣れていない訳ではないが…やはり腑に落ちぬと言うか…そういった物があるな」

「同感だわ、その感覚は失ってはならない。剣とは言えね」

「まだ序盤なのに声の震えが最高潮ではないかマリア」

「あんたも体の震えが風邪引いてるのか疑うレベルよ！」

見進めて行くと唐突に驚かされるようなシーンに入る。二人は少しピクリとした後話し始めた。

「まさか急に襲い来るとはな…なかなかの手練れと見た…」

「ちちちち違いないわね」

「落ち着けマリア、一旦休憩するか？」

マリアは自分の肩に置かれた翼の手を握り上げて言い放った。

「貴方も手ガクガクじゃない！お互い様よ！」

「まあ落ち着け、これでも大分緩和されている方なのだぞ」
「えっ」

「フツ…急ごしらえだがある方法を思いついてな、聞きたいか？」

「ええ、一応聞いてやろうじゃない」

「強がるのは声の震えを抑えてからにした方が良いぞ…コホン、では聞かせてやる」

翼はあたかも鬼の首を取ったように話し始めた。

「その方法というのもだな、例えばあの殺人鬼を倒すべき敵として見据える事だ。防人は常在戦場の心意気で居さえすれば怖いものなど何もない」

「なるほど…確かに敵と認識すれば…悪くない方法だわ。早速試してみるわ」

そうして視聴を再開するとまた唐突に驚かされるようなシーンが入る。二人はまたピクリとするが翼は得意げにマリアに話し始めた。「どうだマリア？大分マシになったのではないか？」

「Seillien coffin air gett—lamグツ!？」

突如聖詠を歌い始めたマリアに翼は慌ててマリアの口を塞いだ後手に持っている聖遺物を取り上げた。

「一応聞くが何のつもりだマリア!？」

するとマリアはテレビに映る殺人鬼を指差して勇ましく言った。

「あの下衆を誅するために胸の歌を取ったまでの事！」

「落ち着けマリア!アレを貫くと家のテレビが無くなるぞ！」

「だからとてツ!あの殺人鬼を野放しにする理由などありはしないツ！」

「悪かった!下手な対策を講じた私に責がある!一度剣を納めろ、ここはまだ鞘走る場ではない！」

「くっ…！」

マリアが座ると翼も安堵したように溜息をつきながら座った。その後も何度か驚かされたが特に大きな事態には至らず映画は終幕した。

「くっ…なかなか恐怖心を煽る映画だったな」

「ええ…少し疲れたわね。もう寝ましようか」

「ああ、明日も早いからな。疾く寝るに限る」

「ええ、じゃあおやすみ」

「ああ」

二人はそれぞれの部屋に散るがしばらくすると布団を抱えてリビングに戻って来た二人の姿があった。二人はそれを見て互いに震え始めた。

「フツ：フフフ」

「クスクス…」

二人はしばらく震えていたが糸が切れたように大きく笑い始めた。

「アハハハハハハハハハハ！」

二人はひとしきり笑った後話し始めた。

「全く、防人たる貴方が…ねえ？」

「だからお前には言われたくないと言っているだろう…ああ、だが今宵ばかりはこういうのも良いかも知れんな」

「同感ね、じゃあそうしましょう」

そう言うと二人は布団を並べて先程の事などなかったかのようにこてんと眠りに落ちてしまった。

つばマリ、災難に遭う

照りつける日差しの中、買い物物の帰路についた翼とマリアは談笑しながら歩いていった。

「急に焼肉パーティーなんてね、それも私達の部屋でなんて」

「まあたまには騒がしくなるのも良いだろう。肉も白米も野菜もたんと買ったからな」

「足りるかしら…」

「立花だろうか？よく食べるからな、まあ余らせるよりかはと考えれば良いだろう」

「それもそうね」

そうして歩いていると道の真ん中にセミがひっくり返ってポツンと落ちていた。二人は少し固まったあと翼が切り出した。

「…動くと思うか？」

「まさか、ひっくり返ってるじゃない。動くんてありえない…と思うわ」

「よし、では早足で抜けるぞ。静かに、だが迅速にだ」

「ええ、分かったわ」

二人は無言でスタスタと歩き始めセミの真横に差し掛かった瞬間、待っていたかのようにセミが鳴いて暴れ始めた。マリアはそれにいち早く気づき駆け出すが後ろから服の裾を掴まれて振り向く。そこにはへたり込んで泣きそうな表情の翼が居た。

「どうしたのよ！」

「…腰が抜けた」

「はあ!?何やってんのよ情けないわね！早く立たないとセミが…」

セミは鳴いてバタバタと暴れながらこちらに近づいてくる、マリアは焦り翼の手を引いた。

「ほら立ちなさいっての！セミがこっち来てるわよ！」

「あ…ああ」

翼はなんとか立ち上がると二人しておぼつかない足取りで走ろうとするとセミがひっくり返り飛び始めた。二人は恐怖と驚きで大声

を上げながらその場から逃げ去りなんとか部屋までたどり着いた。

「いや何なのアレ：下手な地雷より効果あるわよ」

「間違いないな：危うくセミに殺されるところだった」

「アンタが情けない真似しなければ良かったのよ」

「ああ、すまない」

「まあ良いわ、少し休みましょう」

二人が部屋で少し息を落ち着けるとマリアが話し始めた。

「さて、そろそろ下ごしらえを始めるわよ。皆来てからでは遅いしね」

「そうだな、下ごしらえなら私も手伝えるだろうか」

「ええ、まずは…」

マリアがソファから立ち上がると目の前にあったテーブルの脚に足の小指をぶつけてしまった。

「ッ!?…くっ…」

マリアがたまらずうずくまるもなんとか立ち上がろうと正面を見る。すると翼がそっぽを向いて震えていた。

「翼…?」

「いや…何でもない、何でもないぞ…フフツ」

「今笑ったわね!」

「クツ…いや…笑ってなど…いないぞ…ククク…」

「笑ってるじゃない!」

「いや…いきなりそんな光景を見せられて笑うなという方が無理だ：ハハハハハツ…お腹痛い…」

「この…ツ!」

マリアは寝転んだまま体を回転させ笑っている翼の脛に渾身の蹴りを入れた。翼はそれをモロに喰らい呻き声を上げて同じようにならずくまった。

「マリア貴様…!」

「フン、良い格好ね翼…ぐう…」

「その格好で言うのかマリア…人の事は言えんぞ…つつつ」

二人は数分悶えたのちヨロヨロと立ち上がった。

「準備しなくちゃ…皆が来ちゃうわ…」

「ああ、まだ痛むがそれでも成さねばならぬ事がある…！」

二人は何とか歩き始めるがふとマリアが躓いた。

「きやつ!？」

「どうしたマリ…ああつ!？」

結果的にマリアが翼に覆い被さる形で転んでしまった。

「いたた…全く今日は災難ね」

「間違いないな。セミに襲われる二人して痛みに悶えたと思えば次はこれか。とにかくマリア、この状態では動けんからはやくどいてくれ」

「ええ、すまないわ…っ!？」

マリアが立て膝になりふと横を見ると驚きの表情で固まった。翼は不思議そうにマリアに聞きつつ自分もそちらを向いた。

「どうしたマリア、何があつ…た」

そこには驚き、悲しみ、とにかくおよそプラスの感情はないが色々な感情の混じり合った表情の響達…響は未来に目を隠されてて翼達を認識できていないようだが、が居た。

「先輩…まさか先輩が…」

「落ち着け雪音！私が間違いを起こすと思うか!？」

「でもそのカツコ…」

「これは不可抗力であって決してやましい事はない！だから話を聞いてくれ！」

「未来!? 見えないよ！離して未来！…と言うか翼さん達どうしたんですか!? 何かあつたんですか!？」

一人騒ぐ響をよそに今度は切歌と調が話し始めた。

「マリア…」

「マリア…どうしちやつたんデスカ…」

「だから貴方達も落ち着きなさい！ただ転んだだけよ！」

「本当に…?？」

「本当よ！信じて！」

ワアワアと騒がしくなってる中目を塞がれている響が「みんな！」

と声を上げて一度その場を鎮めた後話し始めた。

「よく分からないけど翼さんもマリアさんもきつと何もしてない、大丈夫だよ！みんな疑わないであげて！信じる事を、諦めないで！」

響がそう言うのと少し沈黙が続いた後どつと笑いが起こった。そしてその後クリスが息を切らせながら話し始めた。

「ハッ…本当お前バカだな…その格好で何言つてやがるんだ本当に…まあ良いや、なんかどうでもよくなっちゃった。なんかすいませんね先輩」

「ああ…分かってくれたのなら良いんだ」

「ごめんなさいデスマリア」

「ごめんなさい…」

「ええ、良いのよ」

そして皆は和気あいあいと鉄板を囲み焼肉を始めた。

【番外】 かなセレ、見守る

ここは一般的に「あの世」「天国」と呼ばれる場所。そこで天羽奏が翼とマリアを見守っていた。

「平和だな二人とも、うん、良いこと…お？」

マリアが玄関に出て何か小包を持ってきて翼と話していた。奏は「ははーん」と口角を上げて言った。

「これは面白い事になるか？おーいセレナー」

奏がセレナと呼ぶと栗色の髪の少女がやってきた。

「どうしたんですか奏さん？」

「なんか面白い事が始まりそうなんだ、ほら」

「面白い事…？」

セレナが見るとホラー映画のパッケージを前に言い合いをしている二人が見えた。

「ホラー映画ですか、確かに姉さんは苦手ですが…」

「翼も苦手なんだこう言うの。もしかしたら成長してるかも知れないけどな」

「それもそうかも知れませんが、じゃあ私も見てみます」

二人が見ていると体がガクガク震えている翼と声が震えているマリアが言い合いをしている中、奏とセレナは苦笑いしながら顔を合わせた。

「姉さんはやっぱり変わってないなあ」

「翼も変わってないな、まあノイズじゃホラーは鍛えられないか」

二人が言い合いを終えた覚悟を決めた様子でソファに座って映画を見始めた。

「おっ、見始めるか。流石だ翼」

「頑張つて、姉さん…なんて言う私もホラー苦手なんですけど…」

「そうだったのか？まあ大丈夫さ、いざとなれば私の後ろにでも隠れれば良いさ」

「えっ!？」

「ん？どうした？急に顔赤くして」

「い、いえ。ありがとうございます」

「ああ、どういたしまして」

そうして二人はまた翼とマリアを見始めると翼がマリアにホラー映画の対処法を教えているようだった。

「対処法かあ、一応成長したのか？」

「にしても敵ですか、姉さんが変な事しなきゃ良いけれど…」

「変な事？マリアなんかするの？」

「いえ、多分大丈夫だと思うんですけど」

「そうか？」

そうして話していると唐突にマリアが胸のコンバータを取ってシンフォギアを装着しようとしたところを翼が慌てて止めていた。セレナはそれに驚き思わず立ち上がった。

「姉さん!？」

「まさかシンフォギア纏おうとするほど敵意が高まってたなんてな。翼もすこしやり方間違えたんじゃないか？」

「ああびつくりしました…姉さんてば変に思い切りが良いんだから…」

そして翼とマリアはなんとか見終わったようので就寝の準備をしていた。

「二人は寝るのか、じゃあ私達も寝るか」

「はい…あ」

「ん？どうし…ああ」

二人が見たのは布団を並べて寝ていた翼とマリアの姿、その光景に二人は和んだ様子で話し始めた。

「全く、成長したんだかしてないんだか」

「でも仲よさそうで良いじゃないですか」

「まあそうかもな」

「あと…」

「ん？」

セレナは恥ずかしそうにモジモジしながら奏に言った。

「その…怖かったので私も一緒に寝て良いですか？」

「もちろん、頑張ってたけど少し震えてたもんな。いいよ」
「えへへ…ありがとうございます」
そうして奏とセレナも寄り添って幸せそうな顔で眠りに落ちた。

つばマリ、ポツキーゲームをする

昼下がり、翼が部屋でテレビを見ていたところマリアがやって来て話しかけた。

「翼」

「どうしたマリア？」

「ポツキーゲームしない？」

「ポツキーゲーム？」

少し挑戦的に笑いながらポツキーの箱をちらつかせる翼は聞き慣れぬ単語にキョトンとしてマリアに説明を求めた。

「なんだそれは？ポツキーで遊ぶのか？」

「認識がそのまんまね…まあ間違つてはないけど。アレよ、最近流行ってる二人がポツキーの両端を加えてそのまま食べて行って食べ切ったら成功よなんならほら、今日ポツキーの日よ」

「ふむ…ん？」

翼は疑問の顔を見るとマリアに再び質問をした。

「それではアレか？成功イコールキスと言うことか？」

「まあそうなるわね」

「ふむ…」

「何？恥ずかしいの？」

「いや…」

翼は困った顔で少し考えると少したどたどしく話し始めた。

「こう…なんだ、別にするのは構わんが節度というものがな…と言うかマリアはそう言うのは大丈夫なのか」

「別に翼となら一瞬触れるくらい気にしないけど？」

「そうか…ならやってみるか、たまには流行りに乗るのも悪くはないだろう」

「決まりね」

マリアはポツキーを一本出すと端を啜って翼に差し出した。

「ん」

「ああ、では行くぞ」

翼ももう片端を啜えサクサクと食べ進めて行く。

(ポッキーをこのように半分づつに分けるとは、何か変な感じだな。それと思ったより…)

(どーせチヨコの方だしなんなら少し多く頂いちゃおうかしら。それにアレね…思ったより…)

そんな事を考えていると不意に唇が付く、二人は一瞬ピクツとするがすぐに離し二人とも何か言いたげに話し始めた。

「成功は成功だけど何か…こう…」

「多分私も同じ気分だ、せーので言ってみるか」

「良いわよ、せーの」

二人は一拍おいて思った事を口にした。

「思ったより面白くなかった」

それは二人とも一言一句同じ言葉、それを聞いたマリアが呆れたように少し笑い話し始めた。

「そうよね、そうじゃないかと思って居たわ。顔が近いと分かることもあるものね」

「間違いないな、マリアもどこか面白くなさそうだったからな」

「まあ一応貴重な体験だったと思いましようか」

マリアが笑って言うと言ったと翼も同調するが少し眉をひそめてマリアに聞いた。聞いた。聞いた。

「マリア、さっきのポッキー少し多く食べなかったか？」

「あら、何のことかしら」

「シラを切るのはオススメしないぞ」

「分かったわよ、ポッキー一本多くあげるからそれで手打ちにしてちょうだい」

「良いだろう、むしろその言葉を待っていた」

「現金ね」

「それもそうだな」

そこまで話すとどちらが始めたでもなく笑い始めひとしきり笑った後翼が言った。

「やはりこう言うのは普通に食べるべきだな」

「そうね、私もそう思うわ」
そうして二人の平和な昼下がりは過ぎていった。

つばマリ、サンタをする

街が楽しいな雰囲気にもまれて眠る聖なる夜、そんな中バイクに跨る二人の女性がいた。一人はサンタの衣装にクリスマスカラーで装飾したヘルメットを被りもう一人は同じような衣装でプレゼント袋を担いでいた。その二人とは…

「マリア、袋は持ったな？」

「もちろん」

「プレゼントの中身は確認したな？」

「緒川さんと一緒に確認済み、全部あるわ」

「ヘルメットを被ってバイザーは降ろしたな？」

「大丈夫よ」

「完璧だな…防人サンタ、いざ推して参るッ！」

翼はエンジンを吹かしてバイクを発進させる、道中再び翼がマリアに話しかけた。

「マリア、ホントにポストで良いのか？やはりサンタをやる以上は枕元に…」

「切歌と調の家とクリスの家なら合鍵あるから行けるけどこの二人はダメじゃないかしら」

「くっ…やはりままならない…ッ！だが防人サンタはどんな形であれプレゼント配りを遂行してみせるッ！それがサンタの！ひいては夢を防人る私の使命なればッ！」

「ええ、やっちゃいなさい！」

翼達は決意を新たにしつつ響と未来の家に着する。

「ここだな、ポストはほど近い。そう警戒するほどでもないだろう。マリア、プレゼントを」

「ええ」

マリアはプレゼント袋を担ぎ翼が先導してプレゼントをポストに入れて次の家に向かう。

「次は暁と月読の家だったな」

「ええ、極力静かに行きましょう」

そして二人の家に到着する、マリアが持っていた合鍵を使い家の中にそろりそろりと入っていく。

「気をつけるマリア、音を立てるな。身内とは言えやってる事は立派に犯罪だからな」

「そう言えば気になってたのだけど配ってるメンバーの中でサンタを信じてるの切歌くらいよ、不審がられないかしら？」

「…」

翼はマリアの問いに答えず忍び足を続けていたがマリアはそのまま問い詰めた。

「…まさか考えてないとか言うんじゃないでしょうね？」

「話せば分かってくれるだろう、皆優しいからな。私もその優しさに助けられてきた…」

「いい話っぽくしようとしてるけど騙されないわよ」

「…その時は、一緒に謝ってくれるな？」

「…分かったわよ、仕方ないわね」

そんなやりとりをしつつ寝室にたどり着く。切歌と調の枕元に行くと二人は一緒に布団で手を繋ぎあつて寝ていた。

「…この二人は寝ててもいつも通りだな、仲良きことは美しき哉と言うからな。雪音なら怒っていたかもしれないな？」

「軽く毒づくくらいはしたでしょうね。とにかくさっさとプレゼント置いて次行くわよ」

「ああ」

二人はプレゼントを置いたのち寝てる二人に向かって「メリークリスマス」と小さな声で言った後最後のクリスマスの家に向かった。

「次は少々強敵ね、策はあるの？」

「起きたらその時はその時だ、多少強引にでもプレゼントは受け取ってもらおう。それが防人サンタの流儀だ」

「具体的には？」

「こう…手刀で…ズバツと」

「バカッ！可哀想じゃないッ！」

「え？…あ、ああ。ボケのつもりだったのだが…」

「貴方が言うのと冗談に聞こえないわよッ！」

「うーむ…私とて冗談の一つくらい言うのだが…やはりままならぬい」

翼がぼやきつつもクリスの家に到着し二人は合鍵を使おうとする
とドアが開いていた。

「む？」

「どうしたのよ」

「開いているぞ」

「あら、あの子そんな不用心だったかしら」

「いや、そんな筈はないと思うが…まあ開いていると言うのなら入ろう」

二人がクリスの家に入ると奥の方から何か物音が聞こえてきた。

「まさかまだ雪音が起きているのか？」

「それだったら普通に渡しちやいましょ、起きた時が怖いわ」

「一理あるな、ではそうしよう」

二人は物音のある方に向かう、そして扉を開くと黒づくめの男が物
漁りをしていた。翼は一瞬驚くがマリアが前に出る。翼達に気づき
立ち上がった男だったがその瞬間マリアのボディブローがまともに
入り男は倒れ伏した。

「流石、やるなマリア」

「それほどでもないわ。けれど…」

「ああ…」

男を取り抑えた二人が扉の方を見るとそこにはパジャマ姿のクリ
スが立っていた。

「よお先輩方、二人して愉快な格好して捕物たあますます愉快だな？」

「メリークリスマス、雪音。だがまずは警察が先だ、呼んでもらえる
か」

「分かったよ。あ、お前らは勘弁してやるけど後で話聞かせろよ」

「…良いだろう」

男が警察に連れてかれた後クリスの部屋で取り調べが始まった。

「で？ 仏教徒のあたしに隠れてクリスマスプレゼントか？ めでてえな

オイ」

「私も仏教徒だが…」

「皮肉で言ってるんだよッ！」

雪音が怒声をあげると一旦なだめてマリアが話し始めた。

「確かに不法侵入よ、そこは謝るわ。だけどプレゼントは受け取ってほしいの」

雪音は「あー…」と少し困惑した後話し始めた。

「しゃーねーな、くれるってんなら貰ってやるよ」

「本当か！感謝する雪音！」

「ここで受け取らねえってのも後味が悪いだろ」

「雪音らしいな、あとだな…」

「あ？なんだよ」

翼が真剣な顔で話し始めた。

「もしよければなのだが…」

「ああ」

「もし怪しまれた時は…一緒に謝ってくれないだろうか」

「あたしを共犯にすんじゃねえッ！それはテメエらでやれっの！」

「そうか、まあそうだろうな。悪かった、では邪魔したな」

「おう、じゃあな」

「ああそうだ、雪音」

「ん？」

翼はマリアと一緒にクリスマスに言った。

「メリークリスマス」

「…おう」

「む…反応が悪いな。まあ良い、また会おう」

「今度こそじゃあな」

翼とマリアはクリスマスに見送られ家に帰り着きその後は疲れたのか倒れ込むように寝てしまった。翌日、やはり二人して謝る羽目になったのはまた別の話。

つばマリの愛してるゲーム

「ずっと…ずっとモヤモヤしていた…」

テーブルを挟んで椅子に座っている翼とマリア。神妙な顔で話している翼にマリアは真剣な面持ちで聞いていた。

「少し前から抱いていたこの気持ちはなんなのだと分からなかった…いや、本当は分かりたくなかった。この感情に素直になつてこの平穩が崩れてしまうと思うと怖かった…だが…ッ！」

翼は覚悟を決めたように表情を引き締めてマリアを見据えた。

「覚悟を決めた。私は、風鳴翼はお前を愛しているッ！」

翼がそう強く言うのとそれを受けたマリアは少し俯いて考えた後答えた。

「…ダメね」

「なっ…!? どうして…」

「それは…」

マリアは言い淀んだ風にそう答える。

「クツ…」

翼は悔しそうに机に伏せてしまう。それを見てマリアは困惑したまま続けた。

「にしても…進まないわねこれ」

だがその口から出た言葉はこの雰囲気似つかわしくない言葉であった、しかし翼も伏せつたまま同調する。

「ああ…暁から教えてもらったこの「愛してるゲーム」とやら、暇つぶしに始めたは良いが私もマリアも全く照れず…」

「挙句シチュまで付けて告白のようになしてみても全く変わらず30分経過…ね。切歌はすぐ終わるって言ってたけどどう言うことかしら」

翼は起き上がり困ったような顔で話し始めた。

「マリアから求愛されても特に何も感じないと言うか…決して嫌いというわけではないのだが何故だろうな」

「奇遇ね、私もよ。変な話ね」

「全くだ、これでは終わらぬではないか」

「このまま終わるのも締まらないし…」

「そうだ」

翼はおもむろに立ち上がり携帯を取り出して少し操作した後誰かと話し始めた。

「もしもし、今暇か？そうか。ならば今から来れるか？分かった、待っている。ああ、ではな」

翼が通話を切った後マリアに言った。

「雪音を呼んだ、これで多少なり進展が望めるかもしれん」

「面白いわね、じゃあ来た瞬間に不意打ちって言うのはどうかしら」

「良いな、たまのいたずらだ。雪音も許してくれるだろう」

「じゃあ私がやるわ」

「承知した」

二人がそう言っただけでクスリと笑う。しばらくしてクリスがやって来た。

「邪魔するぜ。で？なんだよ先輩、急に呼び出したりして」

「実はマリアが雪音に話したいことがあるそうだ」

「マリアが？あたしに？」

「ああ、とりあえず上がってくれ」

「おう」

二人がリビングに入るとマリアが真剣な表情で椅子に座っていた。

「ああ、いらつしやいクリス」

「おう。で？なんだよ話して。次S・O・N・Gであった時とか

じゃダメなのか？」

「ちよつと込み入った話なの」

「そうかよ、じゃあキツチリ聞かせてもらおうか」

クリスはそう言っただけでマリアの対面に座る。マリアは本題に入る前に翼に言った。

「翼、少し外してくれるかしら」

「ああ、承知した」

翼はそう言うと言った自分の部屋に入って行った、その様子を訝しんだクリスはマリアに聞いた。

「おいおい、先輩も外させるってどう言うことだよ。そんなに人に聞かせたくないってことか？」

「ええ…今から話す事はちよつと…ね」

「…お前がそんな顔するって事は相当なんだな。聞かせてみる」

「実はね…」

　　マリアは神妙な面持ちで話し始めた。

「私ね…おかしくなっちゃったみたいなの」

「何だ？病気か？それだったらあたしじゃなくて病院に…」

「違うの」

「はあ？どう言う事だよ」

「最近あなたといると胸がザワついたり締め付けられるような感覚になるの」

「え…おいそれって」

　　クリスは目に見えて慌て始める、マリアは構わず続ける。

「ええ…そう言うことよ、あなたを愛してしまっているみたい。おかしいわよね、こんなの」

　　マリアは自虐的に少し笑う。クリスは俯いたまま動かなかつたが覚悟を決めると顔を上げた。

「そんな事…ッ！」

　　顔を上げたクリスの目に入ったのはいたずらっぽく笑うマリアと後ろで「ドツキリ大成功」の看板を掲げた翼だった。それを見たクリスは机を叩いて顔を赤らめた。

「お前らア~~~~~!!!」

「ほらクリスアレよ、最近はやりの愛してるゲームってやつよ」

「にしても雰囲気出すぎだろ！そんな浮ついたゲームに本気出すんじゃないやねえよ暇人歌姫！」

「暇人とは失敬な、これでも貴重なオフなのだぞ」

「だったら尚のことだろうが！」

　　翼とマリアはクリスを宥めた後二人で提案した。

「よし雪音、お前もやってみろ」

「はあ？何であたしが。やだつての恥ずかしい」

「じゃあ私達を照れさせたならラーメンおごってあげるわ」

「う…ラーメンか…現金でちよいと悔しいがやってやるよこんにやろッ！」

クリスマスは決意を固めるもののまだ顔は赤くモジモジしていた。だがしばらく逡巡したあとキツと翼達の方を向いた。

「あ…！」

そこまで言うとはやはり恥ずかしくなったのか蚊の鳴くような声で言い直した。

「あ…愛してる…」

それを見た二人は自分たちまではずかしくなっていましたまったのか少し顔を赤らめた。

「雪音、ちよつとずるくないか…？」

「可愛すぎよアンタ…」

「は…はあ!?!なんだよ！お前らがやれって言ったんだろ！…とにかく！お前ら照れてんだから貰うもんは貰うからな！」

「約束は約束だからな、良いだろう。大盛りでも全部乗せでもどんと来いだ」

「ええ、世界の歌姫の財力をナメてもらっては困るわね」

「随分と庶民的な世界の歌姫だなオイ…まあ良いや、行くぞ」

道中、ふと翼が切り出した。

「あの雪音の顔、写真に撮って立花達に送っても良かったかもしれんな」

「ああ…それもそうね、惜しいことをしたわ」

「デメエらあ…」

クリスマスはわなわなと震えたあと大声で叫んだ。

「良い加減にしやがれエッ！」